

大規模講義運営手法の現場報告と検討 その2

泉 敬 史

はじめに

2003年秋学期の共通科目「中国文化論」（以下「秋」と記述する）は履修者数355人で、春学期開講の「日中関係論」（以下「春」と記述する）同様の大規模講義となった。「春」の運営状況とそこに見出された諸課題については前篇で述べたとおりであるが、ここでは、それに対応する形で開講した「秋」での状況の報告と検討を述べていきたい。なお、本稿は二篇に分けた後篇部分である。前篇も本紀要に掲載されているので、そちらから目を通していただきたい。

1. 「秋」でのとりきめ

秋学期初回の講義で以下のプリントを配布して講義運営上の提案をおこなった。提案内容は「春」で残された課題に対処するものである。内容と提案理由を説明し、質問や意見を求め、その上で全員がこの提案を理解することを確認した。

..... プリント

2003年10月7日

2003年秋学期「中国文化論」講義運営について（提案）

泉 敬史

はじめに

春学期の「日中関係論」は376名が履修し、78%が単位を取得した。成績評価はレポート記述と出欠を主な根拠とした。ただし、配慮すべき欠席事由を申し出た履修者に対しては、できる範囲で対応した。学期初めに講義上のとりきめ事項を提案し、履修者諸君の理解と協力を得て、ほぼその通りに運営することができた。最終回に「秋学期に反映させる」ことを約束して「学生による授業評価アンケート」を実施し、講義への満足度、不満度の把握を図った。このアンケートは講義の質を向上させる上での貴重な情報ツールであり、気づかされることが多い。また、担当教員としての励みにもなる。今回特に目に付いたのは、私語公害への苦情と、レポート執筆時間が短いという指摘だった。これは私にとっての大きな反省点である。この2点への徹底対応と、その他の意見、要望も踏まえて、秋学期では以下のようなとりきめを提案する。

1. 教室でのとりきめ事項

① 私語公害のない講義を全員の協力で実現する。

—私語者には即退出を求める。私語公害に迷惑するのは私ではなくまわりの受講者である。だから私は、「まあ、今回はいいでしょう」と言える立場にない。したがって、不本意ではあるが、問答無用で退出を求める。

—春学期では教壇にいる私が気づかない私語が横行した。私もあまり講義にばかり夢中にならないようにするが、履修者諸君も、互いに私語を許さない態度を貫いて欲しい。「静かにしてよ」と注意することは、全履修者全員が持つ当然の権利である。

② 遅刻者による迷惑を最小限に抑えるために、遅刻者席を設ける。

—プリントのやり取りなどでざわついている時間帯が過ぎた後（講義開始後）に入室する場合、必ず教壇に向かって左側の入口から入り、A、B、C各列の7番座席から6番、5番、4番、3番、2番、1番の順

に着席する。

—したがって、A、B、C各列の1番から7番の21席は、始業時には空席として空けておく。

—遅刻者席が埋まってしまった場合、それ以後の入室者には不本意ながら聴講は諦めてもらう。

- ③ 携帯電話の電源を切る。
- ④ 座席指定は解除する。

2. 講義でのとりきめ事項

- ① A4版400字詰め縦書き原稿用紙 (Campus KOKUYO ケ-70・生協価格¥198がオススメ) を各自購入する。
- ② 毎回のレポートは自宅でこの原稿用紙に記述し、次回講義時に提出する。なお、A4版縦書き400字詰め原稿用紙以外の用紙は受け付けない。また、提出方法は講義の中で説明する。
- ③ レポートは毎回1枚、400字以内でまとめる。書き方は講義時にくわしく説明する。
- ④ レポートには朱を入れ、返却する。返却方法も講義の中で説明する。
- ⑤ レポートには思考の経緯を記述する。誤字の有無をまず見る。きちんとした字で書いているかを次に見る。論理的か、根拠はあるか、表現は適切かを最後に見る。考え方の中身によって評価を左右することはない。発想や着眼点にも注目する。
- ⑥ 毎回講義のおしまいに「ミニッツペーパー」を提出する。出欠確認にこれを充てる。これに書くのは、その日の講義に関して諸君が書こうとするレポートの「キーワード」である。「キーワード」については講義でくわしく説明する。その他講義への感想、意見、要望、私語公害報告等、何を書いても構わない。これらの記述は積極的な授業参加として評価する。提出方法は講義の中で説明する。
- ⑦ 視覚教材を計画的に活用する。各月最終週をこれに充て、1時間程度の

VTR を上映する。授業内容とはリンクさせないが、レポート提出は求める。

2. 「秋」での課題対応結果

「春」が残した課題は前篇で述べたとおりであるが、ここに繰り返すと、遅刻・私語・レポート・視覚教材の4つに関する講義運営手法上の問題であった。結論から述べると、「秋」では、準備した対応策のおかげでほぼ全面的にこれらを改善することができた。毎回講義後に出席者全員に提出させる「ミニッツペーパー (添付①)」に書かれたコメントからも、かなりの効果があったことが把握できた。

..... ミニッツペーパー

添付①「ミニッツペーパー」

1分間で書くという意味で、宇佐美寛氏の著書から拝借したアイデア。講義への理解度や満足度を把握するため、毎回講義のおしまいに提出を求める。背番号 (前篇参照) と氏名を書かせて出欠根拠ともする。キーワードとは翌週提出するレポートのテーマのことで、これが書かれていない場合は出席と認めない (背番号と氏名だけでは「代返」が可能である)。A5版。毎回教室入室時に教壇上から持っていかせる。

月 日

背番号	氏名
本日の講義で決めたキーワード	

自由記述欄

また、本講義の評価根拠となるレポートの品質も目に見えて向上し、授業運営の品質向上と授業効果の向上が比例したことが確認された。

さて、具体的にどのような対応策が効果的であったのか、以下にそれを述べていきたい。なお、視覚教材使用上の課題については、前掲のプリントに書いたとりきめ提案の、「2. 講義でのとりきめ事項」第⑦項に記したとおりに実施し、一定の効果を上げることができたので、ここでは触れない。

3. 対策と結果

① 遅刻

遅刻者専用席を設けた。遅刻者をゼロにしようとするのではなく、遅刻者はゼロにならないことを前提に、そこに発生する遅刻公害の最小化を図った対策である。従って、遅刻者の入室を制限することはしなかった。3102 教室は前方教壇側に左右二ヶ所の出入口があるが、その黒板に向かって左側入口に近い3列を遅刻者席として空けておき、遅刻者は入室後速やかにそこに着席することにした。要領としては、講義開始時に右側入口に以下のような貼紙をバインダーに挟んで立てかけた。

遅れてきた人へ

講義はすでに始まり
ました。

反対側入口(→)
より入室し、遅刻者席
に着席してください。

中国文化論担当
泉 敬史

これらの措置で遅刻入室者は肅々とこれを遵守し、遅刻公害をほぼ無くすことができた。また、予想外なことに、当初は多かった遅刻者の数も、回数を重ねるにつれて減少し、後半には毎回1～5人程度に収まっていた。もっともこれは、遅刻者席の効能というよりも、全体的な講義秩序の向上のおかげで始まった善循環の現れと思われる。

② 私語

私語者は即退出させることをとりきめた。もっとも、このとりきめを有効に機能させるためには、いくつかの事前措置が必要だった。大教室の教壇からは気づかない私語もある。どうせ気づかれないだろうと思われていてはとりきめは機能しない。そのため、私語公害の有無が自然に公開されるような方法を考えた。私語公害のいちばんの被害者はきちんと聴講しようとしている学生である。そこでミニツツペーパーが、彼らからの「被害届」として活用されるように誘導した。学生とのやりとりツールたるミニツツペーパーを「被害届」にしてしまうのは本来的な用途からは外れるものであるが、ここではそれに目をつぶった。そして、「私語をしている人がいた」というコメントが1つでもあれば翌週の「配布プリント」でそれを全員に公表し、「まだわからないのか」といったお説教をした。諸君が履修し受講する講義なのだから諸君自身が向上させようと心がけるべきであると説いて、なぜ互いに注意することができないのかと挑発した。私語に気づいたら「シー」と発声して注意することを求め、「シー」の発声練習まで行った。私に私語を指摘されれば即退出となるのだから、互い

に注意することはむしろ親切なのだと話し、「シー」の発声を促した。

こういった措置は予想以上の効果をもたらした。「被害届」の件数は目に見えて減少し、「きょうはとても静かに授業を聴けた」といったコメントが出されるようになった。お説教は不要となり、ミニッツペーパーは本来的な用途に使われ始めた。状況の変化は後に添付する「配布プリント」を参照願いたい。

私語への対応はその場限りのものであってはならない。また、一度なくなったからといってそれが持続されるものでもない。繰り返し注意を促すことによって、講義の主体が誰にあるのかを学生に分からせる演出が必要であろう。なお、実際に退出させたのは1件・2名のみであった。

③ その他の対策と結果

ここで「配布プリント」を5週間分添付する。「秋」で実施した対策がどんな結果につながり、講義を通じてどのようなやりとりがあったのかを読み取っていただけるはずである。レポートの作成には大きな課題が残されていた。「秋」に実施した新たな手法は、これに対する最終回答に近い成果をもたらすことができたように思う。提出された全レポートを添削し、コメントを付記してABC評価を明記の上翌週に返却するという手法は、それだけでもかなりの工数を要したが、そこにさらに、配布プリントによる講評と返信、「A」評価レポートの発表というサービスを付加したことにより、講義への取り組み姿勢やレポートを書く姿勢にプラス効果が明らかであったように思う。

..... プリント

添付②「配布プリント」

プリントは2枚用意した。ひとつは講義内容を書いたレジュメで、もう1枚がこの「配布資料」である。ここでは

- ① レポートの講評とABC評価別篇数公表
- ② ミニッツペーパーへの返信
- ③ 「A」評価レポートの公表

を行った。①と③はレポート作成能力・日本語表現能力の向上を図ってのもの

である。②はいくぶんお説教くさくなつたが、道理とか常識とかを分からせようとした結果である。

中国文化論配布資料 (2003年11月11日)

1. レポートについて

二回にわたって全員のレポートをコメント付きで返却しました。大部分が「記述・評価・解釈」に関するものでした。何度も言っている通り、私が求めているこの形式は、良いレポートを書き易くする方法のひとつに過ぎません。これが身につくとかなり役立つと思うから、二回にわたって同じようなコメントをしました。形式としては簡単なこと（実際書くにはコツが要り、これを身につけるにはトレーニングが必要）なので、これ以上同様のコメントは繰り返しません。

2. ミニツツペーパー自由記述への返信

- ① 私が気づかないだけで、私語者はまだいるみたいです。注意しようとしたが、離れた席なのでできなかつたというコメントがいくつもありました。注意するのはわりと簡単です。「シー！」と声に出してください。それだけでかなり伝わるものです。遠くてもいいから、気づいた人は「シー！」と言う。これをぜひやってみてください。
- ② 先週の講義は難しすぎたというコメントがありました。一方で、面白かった、よく分かったというのもありました。大教室での講義はこのあたりが難しい。先週は主に「流れ」を話しました。今週はなるべく「項目」を話します。先週と比べて今週はどうだったかをコメントして下さい。たぶん「項目」の方が分かり易いとは思いますが、面白味は減ります。それにこの講義は専門科目ではないので、どうしても「流れ」の話が多くなります。コメントは、どう按分したらいいかの検討に役立ってます。話し方がまだ早すぎる、との指摘もありました。そうかもしれない。私はもっとゆっくり語ろうと思います。これらの対応は、私語公害の減少に

も役立つことでしょう。

- ③ もっと新しい時代のことを話して欲しい、興味を持ち易いことを話して欲しいといった要望がありました。つまり、古いことやよく知らないことは面白くないということなのでしょう。今回を入れて講義はまだ8回残っています。どうぞこの機会に、自分の守備範囲を広げることを試みて下さい。難しいとか、分かんないとかに逃げないで、キーワードを探す努力をしてください。なお、「新しい時代のこと」には今後触れることになります。
- ④ 暑いとか寒いとか、ビデオ上映中暗いとか、だからといって明るくすると見えにくいとか、いろいろと環境面での注文が出ています。たぶん、私にできることはもうありません。要望と注文は違います。混同しないように。
「トイレに行きたくなったらどうすればよい？」
……はあ、常識と良識にそってどうぞ。
- ⑤ レポート評価に関する問い合わせがいくつかありました。レポートはABC評価を明記して返却しています。評価の根拠は過去二回コメントで明記しました。必要なコメントは今後も続けます。どうぞ「A」を目指して書いて下さい。不明の点は研究室まで聞きに来て下さい。レポートで「A」を1回でも取れば成績も「A」なのか、とか、欠席が多くても「A」になるのかといった質問がありますが、それを知ってどうするのだろうか？ 答える意味があるとは思えない。
- ⑥ 良く書けたレポートを発表して欲しいという要望がありました。対応します。今回プリントにこのような記述をしたのも、出された提案を採用した結果です。
- ⑦ 「コウトウムケイ」とは何か？ 荒唐無稽と書きます。「言説や考えが、とりとめなく根拠のないこと。でたらめ」(広辞苑)

3. 「A」評価レポート紹介

その一：構成を私の要求に沿って作っている例。表現に難はあるが論旨は

通っている。

「私は石窟の映像を見たのは初めてです。その大きさに驚きと感動を覚えました。これほど素晴らしい物がほとんど破壊されずに残ったことは本当に珍しいです。ビデオの中で戦乱を避け、修業をする場とありました。確かにその通りだと私は思います。

まずその理由の一つとして、中国の都から離れているということです。王朝が変わるとき、何事も無く王朝交代が行われることは難しく、反乱や戦争によって前王朝が滅んだ後、新王朝が立つのが良くあることで、その舞台となるのが都です。この都から離れていることで、都の影響が受けにくくなると考えられます。

また、その当時敦煌、瓜州を治めていた曹議金の統治方針の、周辺異民族との友好関係を深めることは、このような辺境の地を治める方針としては正しく、永く土地を治められると考えられます。

以上のことから、修業の地に向いており、戦乱に巻き込まれることがなかったのだと思います。」

その二：自分なりの形式で書いている例。最初に評価を明記し、具体例を示して解釈している。

「私はビデオを見て、榆林窟はただの歴史的遺産ではないと思いました。榆林窟は西窟寺院とも呼ばれ、当時、僧の修業の場とされていましたが、普通の寺院と違って前室と主室に分かれています。前室には壁画が描かれており、中国の文化について様々なことが分るとビデオで語られていました。それはまず、壁画に描かれていた人が着ていた服のことです。先生が前に講義中で言った通り、寒いからとか恥ずかしいからだけでなく、何の民族なのかということを表すために着ていたと解釈されています。このことは当時中国に多数の民族がいたと推測できます。次に壁画の描き方です。線の太さや描か

れている人物などによって時代の移り変わりが分かります。このように榆林窟は一つの文化だけでなく、その間の様々な文化を知ることができるので貴重なものだと思います。」

..... プリント

中国文化論配布資料 (2003年11月18日)

3. 先週提出されたレポートについて

「A」評価：18 篇

「B」評価：24 篇

「C」評価：105 篇

評価不能：2 篇

用紙不備：2 篇

以上 提出合計：151 篇

書式不備が2篇、背番号未記入が2篇ありました。今回までは読みましたが、今後は評価対象としません。なお、この集計発表は提案によるものです。

4. ミニツツペーパー自由記述への返信

- ① 静かに聴けたという声がいくつもありました。うれしいことです。私語を指摘するものもありませんでした。
- ② 授業運営に対するコメントが減り、授業内容に対するものが増えました。これもうれしいことです。適宜この欄で返信していきます。
- ③ プリントの配布や、レポートの返却が煩雑であるといった意見があります。百点満点の方法というのはなかなかないものです。いろいろと考えた上でこうしているので、今の方式を続けます。うしろの人のためにも動作は迅速に、受け取ったらすぐに場所を空けましょう。
- ④ 前回、次のような記載をしました。

『レポートで「A」を1回でも取れば成績も「A」なのか、とか、欠

席が多くても「A」になるのかといった質問がありますが、それを知ってどうするのだろうか？ 答える意味があるとは思えない。』

これに対して以下のようなコメントを受けました。

「なぜ答えないのですか？ 私たちには知る権利があると思います。知ってどうするのかは先生が決めるコトではなくその人がきめるコトだと思います。逆に隠してどうなるんですか？ 何も無いなら話すべきです」

実に糾弾的な文面です。しかも曲解している。このような文面を提出する前に、提出者は行うべきことがあります。相手（私）のコメントをよく読むことです。私は答えることにどんな意味があるのかを問うています。この問いについて、提出者はまず考えるべきです。ろくに考えていないから「知る権利」などと言い出すのです。「知る権利」が無いなどと、私は一言も述べていない。隠してもいない。私がしてもいないことを糾弾するのは意味をなさない。つまり言いがかりです。

私は、「知ってどうするのかを決める」のではない。「知らせたらどうなるかを考え」て、それが良い結果につながると思えば知らせるし、良くないと思えば知らせない。これは担当教員の職務です。私は、私の職務上の判断の結果として、「このような質問には答えない」と返信しているのです。

「文責」ということばがあるように、文章を出すことには責任が伴います。自分の書いた文面が相手の目にどう映るのか。これを考える姿勢を身につけてください。

3. 「A」評価レポート紹介

その一：講義内容を的確に記述し、解釈の中でそれをさらに展開させている。

泉先生の、人間が説明できないあらゆるものを説明するために、神という絶対的な存在を創造し、本来人間が持つことのできない力を神に与えた。と

いう話に対して、私もその通りだと思った。

神という万能な存在を作り上げることにより、あらゆる出来事に意味を持たせ、理解できないが故の恐怖から脱却しようとしたのだと思う。原因が分かれば対処法も見つかる。神という存在を創造し、人間が説明不能なことの原因を神の成せる業と考えたならば、神に説明を求めればよいのだ。だから巫女という神と人間をむすぶ媒介が必要になり、その結果神は畏怖の対象というだけではなく、より人間に近い存在へと変化していったのではないだろうか。

その二：自分の解釈を分かりやすく説明するための適切な具体例を書いている。思考が深まると「そういえば」といった具体例に気づき、それを始点に発想が広がるものである。

今回の講義で泉先生は、神話には登場人物を神とすることによって、神ならなんでもできるというような自由な発想が含まれている、とおっしゃった。私はその通りだと思う。

その根拠はこのようなものである。物理的に説明ができないような不思議な現象は、昔に限らず現在でも起きる。そして、そのような摩訶不思議な出来事を、現代人も神のおかげにしたり、あるいは霊の仕業として受け止めている。それだけでなく、それに上乘せするように、自分の勝手な発想をふくらましていく。例えば、私の母は交通事故にあったのにもかかわらず無傷だった。そして、その事故を起こした日が伯父の命日だったことから、伯父が助けてくれたと信じている。このように、人間とは、摩訶不思議な出来事を神という存在をつかって自由に発想し、自らを安心させているのだと思った。

その三：思考の筋道が書かれている。宗教と神話が混同しているところがあるが、講義を聞き思考をした結果自分の考えが持てたのであり、そこに少々の混同があろうとも気にすることはない。提出者にとって

3回目のレポートであるが、毎回良くなっている。

神話というものがなぜ作られたのか、それは古代の人々が、説明のつかない天変地異を神がやったこととして宗教的に考え、それが神話になったと講義では聞いた。

私もそうだと思う。なぜならば、古代の人々は、そう考えることでしか天変地異の恐怖から逃れる術がなかったからだ。しかし、それだけの理由ではないような気がする。最初の神話はこの理由で作られたかもしれないが、神話の一つではなく、何個も作られていることから見ると、人々をまとめるために神話が作られたとも考えられる。人々に神話、つまりは神を信じさせて一つにまとめて支配しようとして、神話を作り、それを利用したのではないか。このような目的も含めて、神話というものが作られたのではないかと私は考える。

..... プリント

中国文化論配布資料 (2003年11月25日)

5. 先週提出されたレポートについて

「A」評価：7篇

「B」評価：16篇

「C」評価：130篇

評価不能：1篇

用紙等不備：2篇

以上 提出合計：156篇

「A」評価が少なかった理由は三つ考えられます。

- ① 選んだテーマが大きすぎる。
- ② 要約した「記述」を書いている。
- ③ 説明ばかりで思考をしていない。

- ① の該当者には「もっと小さなことを書く」といったコメントを返しています。決められた字数ではとても書ききれないようなことを書こうとするから、自分の思考が書けない。たとえば、「日本の神話は中国を真似ている」ではなくて、「イザナミはなぜ女禍を真似て書かれたのか」といった小さな・具体的な事例を考えてみると記述が光ってきます。
- ② の該当者は、「泉先生は日本の神話は中国を真似ていると言った。わたしもそう思う」といった書き出しをしています。これは私が、私自身の話を要約して述べた発言です。そうではなくて、私が述べた具体的な発言を記述すべきです。たとえば、「帝江は黄帝と同じだ」のような具体的なものをキーワードに選ぶべき。私が述べた結論ではなく、私の話の過程からキーワードを見つけ出すのです。
- ③ の該当者は、表現力は充分である場合が多い。それを発揮して、いろいろと具体例を並べた後に、たとえば、「だから日本は中国の神話を真似ていると言えるのだ」といった結論のつけ方をする。でもこれでは説明に過ぎないのです。なぜ真似たのか、真似るということはどんな意味があるのか、といった思考へとつなげていけば「A」評価です。

6. ミニツツペーパー自由記述への返信

- ① 携帯公害があったようです。私も気づきましたが、話を止めたくなかったのが敢えて不問にしました。このプリントを呼んでいる君、携帯のスイッチは切りましたか？ 全員ここで確認してください。
- ② 自由記述欄に質問事項がよく書かれますが、調べれば分かることは自分で調べましょう。辞書をひく習慣は貴重です。

良い質問だ、と嬉しく思うのもあります。「かつての戦争や、今のイラク戦争は、宗教的な関わりなどはあるのですか？」これは多分、宗教に関する講義が質問者の知的好奇心をなにかしら刺激したから出てきた質問だと思います。そうですね、宗教が関係しない戦争など皆無ではないかとさえ思います。いずれ「雑談」で話しましょう。

3. 「A」評価レポート紹介

「思考する」とはどういうことなのか。それが分かりやすいレポートを今週は選んで紹介します。

その一：思考するテーマを自分でたてている。つまり独自の視点。もっと思考の余地はある。また、敬体と常体の混用も見られる。それでも「A」評価。

世界の全ての民族が神話を持っていて、その中の日中神話について勉強しました。これを聞いて、神話はどこの場所でも神とされる空想の動物が出てくると思いました。そしてここに登場する動物は、現在も場所は違えどもその動物を神として信じる宗教がある。そのような所から、神話は宗教と深く通じる部分もあるのではないだろうか。例えばヒンドゥー教の教えの中に、「牛は神聖な動物であるから食べてはいけない」というものがある。何故ここでは牛が神聖視されているかまでは分からないが、恐らくインドの神話の中では牛の姿かたちをした動物が神様として存在し今もなお神として神聖視されているのだろう。また、日本独自の文化の中に、「光ではなく陰にこそ本当の美がある」というものがあるが、これと日本神話は何か関係があるのだろうか。感性の違いだから関係ないかもしれないが、これも文化として考えるなら興味深い問いである。

その二：よく思考している例。表現がおかしい箇所があり手を入れている。それはともかく、よく考えているから「A」評価。考えることができるかどうかは、実は考えるきっかけに気づいたかどうかで決まるのです。考えることは自由。でも、考えるコツを身につけないと考えることはできない。「思考する」とはどういうことか。トレーニングして下さい。

南海の天帝を「倏」、北海の天帝を「忽」、そして中央の天帝を「渾沌」、そして先生は講義の中で、「渾沌」が死ぬことで世界が始まると言いました。これを聞き私はなるほどと思いました。

この「渾沌が死ぬことで世界が始まる」という言葉は、広い範囲で中国の王朝の歴史を物語っていると私は思いました。そう感じたのは、渾沌を「中央を司る天帝」としていたからです。これを王朝に当てはめてみると、中央を朝廷や政治の中核と考えると、その中央が乱れることによりその国が何らかの理由で滅び新しい国が興る。それが新しい世界の始まりと捉えられます。そして『莊子・応帝王篇』の南と北の天帝、「倏・忽」に七日で七つの穴をあけられるとは、中央の混乱に伴う異民族や地方勢力の圧力と私は捉えました。

以上のことから私は、『莊子』の大地の始まりは、王朝の興亡による国家の移り変わりを神話的に捉えたのではないかと考えました。

..... プリント

中国文化論配布資料 (2003年12月2日)

1. 週提出されたレポートについて

「A」評価：11 篇

「B」評価：31 篇

「C」評価：78 篇

評価せず：3 篇

以上 提出合計：123 篇

かなり良いレポートが現れ始めました。うれしいことです。思考するとはどうということなのか、それを理解した人が増えつつあります。ここでは、そうでない人のレポートに多いパターンを紹介します。

- ③ 授業で聞いた事実や知識を再度説明して、それを自説の根拠としているもの。説明をした後に、「これらのことから、私はそう考える」といった結語が添えられることが多い。これでは思考にならない。自分が説明し

たいことがなぜそうなったのかを考えそれを書く。「なぜ仏教だけが中国に伝わったのか」を考えると、「シルクロードが開設されたから」と述べても答えにはならない。無論、考えたことにもならない。論理をつなげる、あるいは深める際に、説明はあまり役に立たないことに気づいて欲しい。

- ④ 「私には分からない」で終わっているもの。これはテーマの建て方が間違っている。分からないことを書くから説明になる。分かる（仮説を立てられる）テーマを選んで、そこでの疑問に自分なりの答えを示せばそれが思考になる。その答えが正しいか間違っているかは、ここでは問題ではない。字数は400字しかないのだから、具体的な、小さなテーマを選ぶことが思考を始めるきっかけになり易い。それではいかにテーマを見つけるかの。見つけようとして真剣に聞くことが第一歩。聞くということと、考えるということは、実は同じなのだということに気づいて欲しい。

2. ミニツツペーパー自由記述への返信

「寒い」といった訴えが時折あります。対策は二種類ありましょう。ひとつは自分で厚着等の準備をしてくること。もうひとつは授業環境の改善を求めることです。たとえば窓が開いて寒いのであれば、それに対する行動を起こせば、環境の改善はすぐにできるでしょう。起こさないのであれば我慢するしかない。もしも、窓が閉まっても寒いのであれば、別の対応が必要でしょうが、それを言う相手は私ではありません。私は苦情係ではないのです。しかるべき部署に言うべきです。自分の要求を通すために、どう動いたら最適かを考えるのは要求者の役割です。私にできることがあるとすれば、その要求をサポートすることです。だとしたら、「教室が寒いです」という書き方を私にするのではなく、「寒いから〇〇オフィスに連絡したが、念のため先生からも言って欲しい」といった文面であるべきです。こういった考え方ができることを「社会性がある」と言います。社会性を学ぶことはとても大切だと

思うので、ここに記しました。

3. 「A」評価レポート紹介

今週は感心させられるレポートがいくつもありました。400字で論旨を論理的に述べているのが主な理由です。内容がすべて正しいと言っているのではありません。「書き方」を参考にして下さい。

その一：論旨（何が書かれるのか）が明らかです。根拠だてがきちんとされている。したがって論理的なのです。

今日は、たくさんある宗教の中で、仏教がなぜ中国に伝わったのかという話だった。先生は、仏教が世界的要素を持つ宗教だったから中国に伝わったのだと言っていた。ここで言う世界的要素とは何なのか。

宗教は文化の一つである。文化の伝達は、中国から日本に伝わった箸文化の違いを見ればわかるように、受容する段階で様々に変化をとげて、最も各国に合った形で受容される。また文化を形成する基盤には、各国の制度も深くかかわっている。古代日本に中国式の制度が伝えられたが、日本は国を運営するに当たって、日本人には合わない制度は省いた。つまり文化は制度に反さないように、かつ都合のいいように変えられていくのだと思った。

あるしっかりとした核があり、それを包み込むものは環境によって様々に変化をとげることが出来るもの、それがここでいう世界的要素であると思う。だからこそ、数ある中で仏教が中国に伝わったのだと思った。

その二：仮説をたて、それに自分の考えを加える。これは「思考」しないとできないことです。私は「根拠を示せ」と言いましたが、実はここでは根拠など示されてはいない。でも、思考の経緯が書かれているのです。私が言う「説明」との違いを見つけてください。

「何故仏教だけが異なる文化圏に伝わったのか？ それは仏教が世界宗教としての力を持っていたからだ、と言うしかない」という泉先生の発言内容に私もそう思います。理由は、講義中でも触れられていましたが、「他に言い様がない」からです。

そこで私が疑問に思った事は「仏教が持つ世界宗教としての力」とは何かという点です。おそらく、それはほかの宗教などにもある、誰もが納得する思想、例えば「人を殺してはならない」という道徳的観念ではないかと考えました。それでは、インド文化圏にある多くの宗教の中から、中国文化圏に何故特に仏教が広まったのか。遣唐使を通じて仏教がもたらされた日本にも共通する事だとも言えますが、それは「文化の質」が似ていたからだと推測をしました。仏教では信仰することにより人間自身が仏という偉大な存在になるとされています。この珍しい思想の宗教を受け入れる文化が、中国や日本にはあるのでしょうか。

..... プリント

中国文化論配布資料 (2003年12月9日)

④ 先週提出されたレポートについて

「A」評価：10 篇

「B」評価：28 篇

「C」評価：102 篇

評価せず：4 篇

以上 提出合計：144 篇

相変わらず分からないことを書く人が多い。「○○を考えたが分からなかった」という記述は思考放棄です。レポートとは分かることを書くものです。分かるとは何か？ 考えられるということです。自分はこの件につき、こう考えると言えることです。その考えが正しいかどうかはここでは問題ではない。自分なりの糸口を見つけて、それについての思考をめぐらすことができる、これ

が分かるということなのです。そしてこの糸口を見つけやすくするコツが、小さなテーマを立てようとする事です。今回「A」評価を受けたレポートの多くがこれに成功しています。糸口はさまざまです。廃仏によって壊された仏像の頭部とか、僧衣の色とか、円仁の日記が果たした役割とか、武宗の気持ちとか、求法の道のりとか、自分に考えられるテーマを見つけて書いている。これが肝心です。

「分からない」のは、難しいからとか詳しくないからとか興味がないからとかではなく、見つけようとする努力が足りないから「分からない」のです。自分にも考えられる糸口を探しだす意志を持って聴講してください。

⑤ ミニツツペーパー自由記述への返信

「中国四大奇書」につき、異論がいくつか出されました。『金瓶梅』は該当せず、『紅樓夢』であるはずだという内容です。まずこの、「中国四大奇書」についてですが、学術的な意味合いはあまりありません。たとえば日本では、世界三大美人としてクレオパトラと楊貴妃と小野小町を数えますが、これは観光地のキャッチフレーズ程度の、かなり俗な言い方です。「中国四大奇書」は専門書でも触れられていますから、これよりは尊重すべき言い方なのでしょうが、学界が正式にこれを認可したといった性質のものではないようです。その上で言いますと、やはり『金瓶梅』が正解です。『紅樓夢』は清代の作であり、清王朝を統治した満族の生活を描いている点で外れているのかもしれませんが。知名度からいっても、文学として見ても、『紅樓夢』であって何ら差し支えはないと思うのですが……。

また、金潘蓮は第二夫人ではなく第五夫人だったはずだという指摘もありました。確認したところ、ご指摘の通り第五夫人でありました。ごめんなさい。訂正します。

3. 「A」評価レポート紹介

今週は、小さなテーマを見つけて書いている例を紹介します。毎回こうして

紹介しても、毎度同じような「書けてないレポート」が多数提出されます。技術は習得しようと思わない限り習得できない。みなさん、今週はちょっと気張ってください。

その一：仏像の頭部が落とされていることに注目している。「なぜだろう」とテーマを提起し、自分の考えをまとめている。

今日のビデオで中国の唐の時代に仏教を学びに行った円仁が訪れた寺、またそこで見た自然や人々の暮らしを知ることができた。私はこの頃に行われた武宗の廃仏政策によって壊された仏を見て、ただばらばらに砕いたのではなく、それらの頭部がないことに気づき、なぜ無いのだろうと思った。以前、仏の手の形には上下に出している指、またその曲がり具合には意味があるということを知ったことがあるが、そのことから考えると、仏の顔は極めて人間の顔に似て様々な表情があり、仏を造る人が一番丹精を込める所で、またそれを拝む人にとっては最も尊く思う所なので、仏にとっては存在感や生命力を表す所と言え、それを無くすことは仏教徒にとってこの上なく悲痛なことだと知っていたからだと思った。(以下省略)

その二：僧衣の色の違いから葬式の考え方の違いを想起して、自分なりの解釈を明らかにしている。

円仁のビデオの中で僧侶が映っていて、日本と中国では服の色に違いがあることに気がついた。日本では黒や白、紫などシンプルで地味な色に対し、中国の僧侶の服が黄色や赤なのが不思議に見えた。日本は数々の中国文化を取り入れてきたが、宮刑同様、取り入れなかった文化もある。

伝統的な中国の葬式は日本と違いカラフルらしい。日本の葬式では黒が中心であるが、中国では赤を多用して、今後このような不幸な事が訪れないように、という願いから不幸を幸福に見せる事で不幸を防ぐという考えがある

とネットで見た。日本も中国も赤はめでたい色とされているが、葬式に対する考えが違う。日本では不幸を幸福に見せる事はせず、不幸を不幸と受け止める。それは日本には「ハレ」と「ケ」の区別がはっきりとしているというのが関係しているように思う。区別を明確にすることによって不幸や悲しみを引きずらないようにしているのだと解釈した。

..... プリント

まとめ

以上前後二篇に分けて、2003年度春学期と秋学期に担当した大規模講義に関する現場報告と検討を、2001年度からのつながりの中で述べてきた。教育の効果というものは、ひとつの尺度では測れない、数字による一目瞭然の指標化が困難であるといった「やっかいさ」を持つものである。そのせいばかりというわけではないが、「効果があった」とするわりにはその根拠がきちんと示されていない箇所があることは、指摘を待つまでもない。はたして何の参考になるのかおぼつかないまま筆を進めてきたが、質問やご意見をいただき、そこで何らかの議論や検討をすることができれば、少なくとも私にとっては確実に参考になると考えた結果である。多くの方々のご示教を賜りたい。

泉 敬史メールアドレス

izumi-t@sapporo-u.ac.jp